

一八八四年三月二十三日(日)

聖ラーマクリシュナ、ドッキネーシヨル南神寺院において、ラカール、ラーム、ニテイヤ、アダル、校長、マヒマー等信者たちと共に

聖ラーマクリシュナが病気で我慢出来なくなるのは何故か？——覚者の境涯

タクール、聖ラーマクリシュナは昼食の供養をうけられた後、ラカールやラームなどの信者たちといっしょに坐っておられる。お体はまだ完治したわけではなく、腕に包帯を付けていらつしやる。今日は日曜日、一八八四年三月二十三日。ベンガル暦一二九〇年チヨイトロ月十一日。

ご自分は病気なのに、タクールは皆を歓喜の市場に坐らせていらつしやる。三々五々と連れ立って信者たちがやって来た。

タクールは、絶えず楽しんでそうに神様の話をして下さい。ときどきキールタン讚神歌をうたつたり、また時々は三昧に入ってブラフマンの歓喜を味わっておられる。そのときは信者一同、ただ驚いてお姿を見守るばかりだ。タクールはお話しになる——。

〔ナレンドラの結婚話——ナレンドラは頭領の器〕

ラーム「(ラジェンドラ)ミトラの娘とナレンドラとの縁談が持ち上がっているのですよ。たいへんな持参金をつけるというところでございます」

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハッハ。そんなふうにして大勢の人の上に立つ指導者のようなものにもなっていない。あれはとにかく、どの方面に進んでも一流の人物になれるよ」

タクールは、ナレンドラの話には触れたくない様子だ。

聖ラーマクリシユナ「(ラームに向かつて)ところで、わたしは病気になる、どうしてこう我慢が出来なくなるんだらうな? 良くなるだらうかなんて、あの人に聞いたりこの人に聞いたり——。わかっているかね? 信じるならすべての人間を信じることに。そして信じないなら誰も信じないこと。

あの御方がドクトル(西洋式の医者)やカヴィラージ(インド伝統医学の医者)になつていらつしやるんだよ。だから、どの医者も信じなけりやいけない。人間だ、などと思つたら信じられないからね」

〔以前の話——シャンブー・マリツクとハラダダリの病氣〕

「シャンブーがひどい錯乱状態になつたとき、医者^{ドクトル}のサルヴァディカリー先生は診察してこう言った。——『これは薬の副作用だ』って。

ハラダダリが、『脈を見てくれ』と言うと先生は、『目を見ましよう。オ! これは脾臓の病だ』

ハラダダリは、『脾臓なんか痛くも痒くもありませんよ』と言つた。

マドゥ先生の薬はいいね」

ラーム「薬はあまり役に立ちません。自然の治癒力を助けるだけのものです」

聖ラーマクリシュナ「薬に効目ききめがないんなら、じゃ、どうしてアヘンをのむと便秘するんだい？」

〔ケーシャブ・センの話——機関誌にタクルルのことについて発表したこと〕

ラームは、ケーシャブ・センが亡くなったことについて話した。

ラーム「あなた様がおっしゃった通りに——良いバラの木は、庭師が根を掘り起こしてきれいにすると露をたくさん吸って、もつと強い立派な木になるようにと——聖人のお言葉通りになりました！」

聖ラーマクリシュナ「そんなこと知らんよ。そんなつもりで言ったわけじゃなし——。お前さんがそう言うんだ」

ラーム「協会の連中は、あなた様のことをスラブ・サマチャーという機関誌に書きました」

聖ラーマクリシュナ「書いたって？ 何でまた！ なぜ、今書くんだね？ わたしゃ、食べたり飲んだりして暮らしているだけ、ナンにも知りやしない。ケーシャブ・センにいつか、『どうしてわたしのこと書いた？』と訊いたらこう言ったよ——『あなたのところへ人が行くようにと思って——』」

〔人を指導するのは神の力を通してのみ——ハヌマーン・シンのレスリングの試合〕

(ラームたちに向かって)——「人の力では人を導くことはできない。神様の力がなかったら、無知無

明に勝つことはできないんだよ。

二人の男がレスリングをした。——ハヌマーン・シンともう一人、パンジャビーのイスラム教徒だ。イスラム教徒はえらく体格のいい奴だった。試合の前の十五日間とその当日とに、肉やバターをふんだんに食べた！ 誰もがこっちの方が勝つと思っていたよ。ハヌマーン・シンは粗末な衣服を着て、試合前の何日かは食べ物も少なめにして、マハーヴィール（ラーマヤナのハヌマーンのこと、レスリングの神様）の名を称えていた。試合の日は全くの断食をした。皆、シンは負けるにちがいないと思っていたね。ところがシンは勝った。十五日間、栄養のいいものを食べていた方が負けた。

出版や広告しても何になる？ 人を導く力は神のところから来るんだよ。それに、この世の欲を捨てなけりゃ、人を導くことはできない」

〔子供の時分——カマールブル村のラハの家でサードゥウの聖典朗読を聞いたこと〕

聖ラーマクリシュナ「わたしは大バカ者だよ」（一同笑う）

一人の信者「それなら、あなた様のお口からヴェータやヴェーダーンタや、そのほかいろいろなことが出てくるのはどうしてでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ。子供の時分に、ラハの家のとこでサードゥウたちが読んでいるのを聞き覚えたのさ。一つや半分は（少しは）抜けたところもあるけどね。学者がサンスクリットで話してもわかるよ。でも、自分でサンスクリットを話すことはできないが——」

〔学問は人生の目的か？——馬鹿と神の慈愛〕

「神をつかむことが人生の目的だ。矢をつがえて的を狙いながらアルジュナはおっしやった。

——『私は他に何も見えない。ただ鳥の目だけが見える。王様たちも見えない、樹も見えない、鳥も見えない』

あの御方をつかんだら、もうそれで十分だ。サンスクリットなんか知らなくてもちつとも構わない。

あの御方のお恵みは、学者だろうと馬鹿だろうと、子供全部に行き渡る——あの御方をつかもうとして熱心になっている子供みんなに。父親はどの子も全部かわいいんだよ。

父親に五人の子がいるとする。一人、二人は、パパとか、お父さんとか、ちゃんと呼ぶことができ。ほかの小さい子はパーと呼んでみたり、トーと呼んだり。——完全に発音できないもんだから。

「お父さん」と呼ぶ子だけを父親は可愛がるだろうか？ 「パー」とか「トー」としか言えない子を差別するだろうか？ 父親は知っているんだよ。幼い子は「お父さん」と正しく発音出来ないって

こと(原典註)を——

〔タクル、聖ラーマクリシュナ、神の人間活動に心惹かれる〕

「この腕を折ってから心境が変わってきてね——神の人間活動の方に、ひどく心が惹かれるんだよ。あの御方が人間になって遊んでいらっしやるんだ。

土の神像を拜むなら、人間を拜めない筈はなからう？

一人の商人がランカーの近くで難船してランカーの岸に流れ着いた。ヴィビーシャナ(ラーマの信者で、そのころランカー=セイロン島で怪物たちの王をしていた)の命令で、彼のところに連れてこられた。ヴィビーシャナは一目見て、『アーハー! これは、私のラーマと同じ人間の姿をしている』と言って大喜びして、その人を着飾らせて礼拝してお灯明まであげた。

この話を最初聞いたとき、私は嬉しくて嬉しくて口で言えないほどだったよ」

〔以前の話し——ヴァイシユナヴァ・チャラン——フルイ・シャームバザールのカルタバジャ派の話〕
「ヴァイシユナヴァ・チャランに訊いたら、こう言っていたっけ——『愛している人を自分の理想神だと思えば、すぐに心を神に向けることができる』と。『お前は誰が好き?』『これこれの人が——』
『では、その人がお前の神様だよ』あちらの地方(カマールブクル、シャームバザールなど)ではこういうことを言い合っているから、『わたしはそんなやり方をしない。わたしは女を母親だと思いうことにしている』と言ったよ。偉そうなことを言っている、その実、道なることをしているのをわたしは知っていたからね。女たちが、『私たち、解脱できるでしょうか?』と聞くから、『できるよ。もし、たった一人の人を神様と思って信じて仕えたらね。何人も男と暮らすようでは救われないよ』と答えた」

(原典註1) マックス・ミュラーのヒバート講座を参照のこと。たぶん、歴史学人間学的に見た神の概念の起源と展開についての講座と思われる。

ラーム「ケダルさんは、カルタバジャ派のところへ行かれたそうですが？」
聖ラーマクリシュナ「あれは、いろんな花から蜜を集めているのさ」

「ハラダリのお父さん——私のお父さん——プリンダーヴァンで小屋に戻る牡牛の群れを見て恍惚となったこと」

聖ラーマクリシュナ「ラーム、ニティヤゴパールたちに向かつて、これがわたしイシュタの理想神だ」と十六アナ(100%)の信念を持っていれば、あの御方をつかむことができる——見ることができ

昔の人はほんとに信仰心が強かった。ハラダリの父親の信念の強さといったら！

娘の家に行く途中、道端にベルの木があつて、何とも素敵な花や葉をつけていた。さっそく神前に供えようと思つて、二、三クロシユ(八、九キロ)の道のりを家まで持つて帰つてきた。

ラームリーラー(ラーマの生涯)の劇があつた。カイケーイーがラーマに向かつて、森へ行つて住むよ
うにとつた。ハラダリの父親が見物に来ていたが、突然立ち上がつて、そのカイケーイーをやつて
いる役者のそばにツカツカと歩みよつて、『この悪者め！』と怒鳴つて、手に持っていたランプで顔
を焼こうとした。

沐浴のあとで水の中に立つたまま、シラクタヴァルナム、チャトウルムカム(赤い肌、四つの顔、南無)と
唱えながら瞑想していたつけ——目に涙をいっぱい溜ためて！

わたしのお父さんが木のサンダルを履いて道を歩いていると、店の人たちは立ち上がつて、『あ、

あの方がいらっしやる」と言ったものさ。

ハルダル池で水浴びしていなさると、ほかの人たちは遠慮して池に入ろうとしなかったものだよ。皆で知らせあつてね——『あの方が水浴びにお行きなすつたかね?』

「ラグヴィル! ラグヴィル!」と唱えていなさると、お父さんの胸は赤くなったものだ。

わたしもそうだったよ。プリンダーヴァンで小屋に戻る牝牛おうしの群れを見て、恍惚うつとりとなって身体が赤くなった。

あのころの人たちは、ほんとに信仰心が強かった。神がカーリーの姿をして踊りなすつて、修行者たちが手拍子を拍うつたそうだよ! そういふ話もあるほどだ」

〔五聖樹パンチャパテイの杜のハタ・ヨーギー〕

五聖樹パンチャパテイの杜の小屋に一人のハタ・ヨーギーが来ていた。アーリアダハのクリシュナキシヨルの息子、ラームブラサンナとほか数名の人が、そのハタ・ヨーギーの熱心な信者になっていた。だが、その人のアヘンと牛乳の代金が月に二十五ルピー必要だった。ラームブラサンナはタクールに、「あなた様のところに来る大勢の信者の方々に話して下さいませんか。そうすれば、ハタ・ヨーギーのためのお金が集められます」とお願いした。

それで、タクールは何人かの信者にお話しになった。——「五聖樹パンチャパテイの杜にいるハタ・ヨーギーを見に行つてごらん、どんな人だか——」

タクール・ダダとマヒマーチャランに対する教訓

タクール・ダダとよばれている青年が二、三の友人と共に入ってきて、タクールにごあいさつした。年の頃は二十七、八才。バラナゴルに住んでいる人だ。バラモンの学者の息子でカターカータ(音楽に合わせて聖典、神話を語る職業)をしている。世間の重荷に耐えかねて、しばらく離欲の生活に入ったことがあるが、つづかなかつた。しかし、現在でも修行にはげんでいる。

聖ラーマクリシュナ「お前、歩いてきたのかい？ 家は何処？」

タクール・ダダ「はい、歩いてまいりました。家はバラナゴルでございます」

聖ラーマクリシュナ「此処に何か用があったのかい？」

タクール・ダダ「あなた様にお目にかかりに参りました。——私はあの御方に呼びかけるのですが、ときどき不安になります。これはどういうわけでございますでしょうか？ 二日か三日ほどは至って明るく楽しい気分なのですが、その後で不安になってくるのです。何故でございますでしょうか？」

〔機械工——真言への信念——ハリ信仰——智慧の二つの特徴〕

聖ラーマクリシュナ「そうか——。うまくいっていないんだな。機械の歯車がちゃんと噛み合えばうまく行くんだが——。ちよつと何処かに障りがあるんだね」

タクール・ダダ「はい、きつとそうだと思います」

聖ラーマクリシユナ「真言はうけているのかい？」

タクール「はい、授かっております」

聖ラーマクリシユナ「真言を固く信じているかい？」

タクール・ダダの友人が口をさしはさんだ——「この人は歌がとても上手なのでございますよ」

タクールはさっそく——「じゃあ、一つ歌っておくれよ、さア」

タクール・ダダは歌った——

愛の山の洞穴に われ行者ヨーギとなつて住み

欲びの泉のほとり 深きヨーガの瞑想おもいに入らん

真理の木の実食べて 智慧の飢えを満たし

離欲の花をささげて 聖き蓮の御足を拝まん

最後の渴き癒さんと 井戸の水は再び求めず

わが胸の壺ととしえに注ぐは 永遠やすらひの平安の水

想こころいは常に雪峰の頂き 聖き御足の甘露のみて

いざ笑い　いざ泣き　また踊り　また歌わん

聖ラーマクリシユナ「アハー、いい歌だね！　よろこびの泉！　真理の木の実！　笑い、泣き、踊り、歌わん。——お前の中からこんなすばらしい歌が出てくるのに、何を今さら！

この世に住んでいるかぎり、喜びと悲しみはついてまわる。誰だって、一つや半分の(少しの)不安や悩みはあるさ。煤だらけの部屋に住んでいれば、体に少しは煤がつくよ」

タクール・ダダ「はあ、——いま何をすればいいのか、おっしゃって下さいませんか」

聖ラーマクリシユナ「朝と晩に手を拍ちながらハリの名をとえなさい。ハリポロ、ハリポロ、ハリポロ、と言って——。

あとで、もう一度おいで。わたしの腕がよくなった頃に——」

マヒマーチャランが入ってきてごあいさつブラナームをした。

聖ラーマクリシユナ「(マヒマーに向かつて)この人が、とてもいい歌をうたつて下さったよ。——うたつてくれ。あの歌を、もう一度」

タクール・ダダは先ほどの歌をもう一度うたつた。

歌が終わるとタクールは、マヒマーチャランにおっしゃった——「お前、あの詩を朗読しておくれ——あのハリ信仰の言葉を」

マヒマーチャランはナーラダ・パンチャラートラから例の一節を朗読した。

愛をもつて神を拜せば 苦行は全く無用なり

愛をもつて神を拜さざれば 贖罪の行は全く空し

神、もし内にも外にも実在すならば 苦行は全く無用なり

神、もし内にも外にも実在さぬとなら 贖罪の行は全く空し

聖ラーマクリシユナ「あれも読んでおくれ——つかめ、つかめ、ハリの信仰を」
マヒマーチャランは読んだ——

ああブラフマン わが子よ 贖罪の苦行を止めて

天なる智慧の大海 シャンカラ(シヴァ)のもとに急ぎ

彼より神の愛 清く清浄なる愛を得よ

それは汝らをこの世に縛る足枷を 打ちくだくであろう

聖ラーマクリシユナ「シャンカラ(シヴァ)がハリ信仰を与えて下さるんだ」

マヒマー「足枷より解き放たれしは永遠なるシヴァ」

聖ラーマクリシユナ「恥ずかしい、憎らしい、恐ろしい、とそれから、ためらい——これが足枷だ。
どう思う？」

マヒマー」その通りです。物事を隠そうとする気持ち、称讃へのためらい」

聖ラーマクリシュナ「二つ、智慧の特徴しるしがある。第一は不動不変の知性フンディだ。幾千の不幸や苦難、悲しみ、災害に遭つてもビクともしない。ちょうど鍛冶屋かじの金床のように、年中金槌かなづちで打たれていても——。第二は力強さ——強い勇氣だ。色欲と怒りが私をダメにすると思つたら、すぐに捨てる！ 亀は手足を甲羅の中に引つ込めたら、四つ割にされても外に出さない」

〔離欲の強弱と猿の離欲〕

(タクール・ダダたちに向かつて)——「離欲には二種類ある。強い離欲と弱い離欲だ。弱い離欲は——ゞそのうち何とかなるさ、無理なくゆつくりやろう。強い離欲は——鋭いカミソリの刃のように、マヤーの足枷あしなをスッパリと切り捨てるゞ。

ある農夫は何日もかかつて溝を掘るが、とうとう池から水を引くことができない！ 根性がないんだよ！ もう一人のほうは、二日か四日掘つたあとで大決心をする。——「今日こそ、何が何でも水を引いて肩の荷を下ろすぞ」と。水浴びも食事もおあずけで、一日中掘りつづけて日が暮れるころ水がサラサラと畑に流れこむ。そのときの嬉しいこと——。それから家へ帰つて女房に言いつける——「サ、油をとつてくれ、水浴びするから」行水して、飯を食べて、安心してグッスリ眠る。

ある男の妻が言った——「何某さんは離欲の気持ちがとてもお強くていらっしゃいますよ。あなたにはそんな気がちつともないようだけれど——。あの方は奥さんが十六人おありで、いま一人ずつ捨

てていなざるところです』

亭主は水浴びに行くところで、タオルを肩先に引っかけていたが言った。——『バカたれ！ その人は捨てられやせんよ！ 少しずつ捨てて捨て切れるものか！ だが、私は捨てられる。ほら見ろ、私は行くぞ！』

彼は家の整理もせずそのままの姿で、肩先にタオルを引っかけたまま家を捨てて出て行った。これを強い離欲というんだよ。

もう一つあるんだよ。猿の離欲ゲルマというやつが——。生活苦に追われて、いたたまれずに僧衣ゲルマを身にまとってカーシー（ベナレス）に行く。しばらくは音沙汰もない。やがて、手紙が一通届く——『みんな心配しなくともよい。私はここで仕事にありついた』（訳註、猿の離欲——猿まね、ものまねの離欲）

世間には苦勞がつきものだ！ 女房は口答えばかりするし、二十ルピーばかりの月給で赤ん坊に食エナブラシヤい初め式エナブラシヤをしてやることもできない。子供を思うように教育もできない。家は壊れかかって屋根から雨が漏っているのに、修繕する金もない。（訳註——生後六ヶ月目に食エナブラシヤい初め式エナブラシヤを行うことが望ましいと『マヌ法典』に記されている）

だから若い人たちが来ると、わたしは家族の様子を聞くんだよ。

（マヒマーに向かつて）——お前たちが世間を捨てる必要があるのかね？ サードウたちの苦勞すること！ ある人の奥さんが言ったそうだ——『あなた、世を捨てるとおっしゃるがなぜです？ 八軒の家をまわって、一食のごはんをもらい集めなけりゃならないでしょう。ここにいれば一軒で食べら

れる。こんないいことはないじゃありませんか」

施食所サツジツク(僧や乞食に無料で食べさせてくれるところ)をさがすのに、サードゥは十キロもまわり道することもある。見たことがあるが、ジャガンナータに参詣するのにまっすぐな道を来たサードゥが、施食所へ寄るためにその道を外れて行つたよ。

結構じゃないか！ 砦にこもつて戦つてるんだ。原っぱに立つて戦えば不利なことがたくさんある。危険だよ！ 体に弾が当たるよ！

けれども、何日か静かな処へ行つて、智識を得てから世間に戻つて暮らさなくてはいけない。

ジャナカ王は智慧を獲てから世間で暮らした。智慧を得たあとなら、どこに住んでも構わないよ。何の問題もない」

マヒマーチャラン「先生、人間はどうしてこうも、世間の俗事に浮身をやつしているのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方をつかまないと、俗事の真つ只中に住んでいるからだよ。あの御方をつかめば、もう二度と俗事に捕まえられない。蛾は一度光を見たら、もうそれからは闇がイヤになる」

〔禁欲、精力保持と神の体得——出家修行者のきびしい戒律〕

「神を覚るためには、精液を出さないようにすることだ。シユカデーヴァたちは禁欲者(戒律)だ。あの方たちは精液を出したことがない。

禁欲者にもう一つある。以前には精液を出したが、後になって精力保持する人。(訳註)

それから、十二年間精液を出さないと特別な力が生まれてくる。体内にメダ神経ナイディイといふ新しい神経ができる。この神経ができるとあらゆることを思い出し、記憶し、また、あらゆることが理解できるようになる。

精液を出すと、人間としての最も重要な力が弱まるのだ。夢精は害がない。それは食物によつてできるものだ。夢精で出したあと、残つた分で十分役に立つ。女と過ごす必要はない。

残つた精液は、とても純化されている。

ラハたちのところには皆、糖蜜を入れる土の壺がある。壺の下の方のところどころ小さい穴があいていて、一年も経つて見るとみんな粒々に結晶している——氷砂糖みたいだね。余計な水分は小穴から出ていくんだよ。

女の人を絶対に近づけない——これは出家修行者サンニヤリンの場合だ。お前たちは関わりを持つてしまつていくが、それは差し支えない。

出家は女の人の絵さえ見ようとしてはいけない。普通の人にはそんなこと出来やしないさ。サ・レ・

(訳註) 禁欲者——ベンガル語でウルド・レタと言う。レタは精液、ウルドは上に引き上げるという意味で、生まれてから一度も精液を出したことがない完全な禁欲者を指す。精力保持する人——ベンガル語でドゥジヨ・レタと言ひ、レタは同じく精液で、ドゥジヨは努力して下に降ろさないようにする、という意味。

ガ・マ・バ・ダ・ニー(ドレミアファに相当するインドの音階)、ニーの音を長い間出してはられないからね。出家の場合、精液を出すのは大へん悪いことだ。だから、彼等は注意深く暮らさなくてはいけないんだ。女の人を見なくてもすむようにね。信者の女のところでも避けなければいけない。女の姿を見ることがさへも悪い。目の覚めているときはいいにしても、夢で射精するからね。

出家が感覚抑制できていても、人びとを導くために女たちと話などしてはいけないんだよ。信者の女のひとでも、長いこと話をしてはいけない。

出家の場合は水さえ断つエーカーダシー(ニルジャヤ・エーカーダシー)だ。もう二通りのエーカーダシーがあるがね。果物の類を食べてもいいエーカーダシー。それから、ルチヤカレーを食べてもいいエーカーダシー(一同笑う)。

ルチヤカレーといっしょに、チャパティを二切れほど牛乳にひたして……(一同笑う)。
ハツハツハツハ。お前さんは水断ちエーカーダシーなどお出来になりますまいよ」

〔以前の話し——クリシユナキシヨルのエーカーダシー——ラジエンドラ・ミトラ〕

「クリシユナキシヨルがエーカーダシーにルチとカレーを食べていた。それを見て、わたしはフリダインにこう言った。——『フリダイ、わたしや、クリシユナキシヨル式のエーカーダシーをしようと思うよ』(一同笑う)。それである日、実行した。腹いっぱい食べたなら次の日、何にも食べられなかった」(一同笑う)

五聖樹パンチヤパティの杜にハタ・ヨーギーを見に行つた数人の信者たちが戻つてきた。聖ラーマクリシユナは彼らに質問された。——「どうだね——どんなふうだった？ お前たちの物差しで測つてきたんだらう？」

タクールは、ほとんどの信者がハタ・ヨーギーに金を出す気がないことを見て取られた。聖ラーマクリシユナ「サードゥに金を出すようなことになる、サードゥが嫌いになる。

ラジェンドラ・ミトラは八〇〇タカもの月給取りだが、前にブラヤーグに宝瓶大集会クンブ・メーラ（インドの四大聖地で三年毎に行われる出家修行者の大集会）を見に行つた。わたしが、『どうだった、大集会のサードゥたちをどんなふうにしたかね？』と聞いたら、ラジェンドラはこう答えたよ——『これといったサードゥには会えませんでした。一人、これはと思つた人がいたのですが、その人でさえ金を受け取りましたよ』

わたしは思うんだがね、サードゥたちに誰も金をあげなかつたら、あの人たちはどうやって食べて行けばいいんだろう？ 此処ではお布施を出さなくてもいいからみんながやつて来る。わたしは思うんだよ——『あいつらは金がホントに好きなんだなあ！ そんなら、しつかりニギニギしていりゃいいさ！』とね」

タクールは少しお休みになった。一人の信者が、小寝台の北端に坐つてタクールの足をさすつてゐる。タクールはその信者にポツリポツリと話していらつしやる——

「形のない神が、形のある神様なんだよ。だから、形のある神様の姿をも認めなけりゃいけないよ。

カーリーの姿を瞑想しているうちに、修行者はそのカーリーの真の相すがたを見ることができんだ。その後で、その相すがたが完全円満な無限者に溶けこんでいくのが見える。完全円満のサッチダーナンダがカーリーなんだよ」

マヒマーの学識、マニ・セン、アダル、およびミーティング

タクールは西の半円形ベランダで、マヒマーたちと例のハタ・ヨーギーの話をしているらしい。ラームプラサンナは信者クリシュナキヨルの息子なので、タクールは彼を可愛がつていらつしやるのだ。

聖ラーマクリシュナ「ラームプラサンナは、あんなふうにしてホイホイ歩きまわっているんだ。いつかも此処へ来て、ひとこともしゃべらずに鼻の穴を指で押さえて、プラーナーヤマ(ヨーガの呼吸法)をやつて坐っていたつけ——。何か食べさせようとしたが何も食べない。ある日呼んでそばに坐らせたなら、足を組んで投げ出して、キャプテン(ネパールの政府代表としてカルカッタに駐在していたヴィシュワナート陸軍大佐)の方に足を向けているんだよ。あれの母親の苦勞を思うと、わたしや泣かされるよ。(マヒマーに向かつて)あのハタ・ヨーギーのことをお前に話してくれ、と言うんだ。一日に六アナ半費用がかかるんだとさ。でも、そのことを自分で話そうとしないんだよ」

マヒマー「自分で言つても、誰も聞きませんからね」

タクールも一同も声を立てて笑つた。

やがてタクールは、部屋のなかに入つてご自分の座にお坐りになった。(パニハティの神殿の) マニ・セン氏が一、二の友人たちと共に来て、タクールの腕の怪我についていろいろ質問した。いっしよに來た彼の友人の一人は医者である。

タクールは、ドクトル・プラタブ・マジュンダールの処方した薬を使つていらつしやる。マニ・セン氏の友人である医者は、プラタブの薬に異議を唱えた。タクールは彼に、「プラタブは馬鹿じゃないよ。お前はなぜそんなことを言うんだい?」とおつしやつた。

ちようどその時、ラトウが大声で、「あ、葉びんが落ちて壊れました」と言った。

マニ・センはハタ・ヨーギーのことを耳にして、「ハタ・ヨーギーとは誰のことですか?」ハタと暖かいという意味ですがねえ」と言った。

タクールはのちほど信者たちに、マニ・センの連れてきた医者についてこう言った——「わたしゃね、あの医者のごとはよく知つてるよ。わたしやジャドウ・マリツクに、『あの手の医者は、全く使い物にならない。他の医者に比べりゃお粗末千万だ』つて言つたのさ」

〔校長と個人的な話〕

まだ日は暮れていない。タクールはご自分の座にお坐りになって、校長と話をしていらつしやる。寝台の片側にマットの上に西向きに坐つておられる。一方、マヒマーチャランは西の半円形ベランダに坐つて、マニ・センや友人の医者と大きな声で聖典についての議論をしている。タクールはご自分

の席でそれをお聞きになつて、笑いながら校長におつしやる——

「おう、やつてるな！ ラジャス性だ！ ラジャス性が、ちよいとばかりの学識を見せびらかすためにレクチャーしたい気を起こさせるんだよ。サットヴァ性は心に向けて隠す。けれど、大した人物だよ！ 神の話にあんなに喜び勇んで！」

アダルが入つてきて、ごあいさつをしてから校長のそばに坐つた。

アダル・セン氏は代理保安長官で三十才近い年令の人である。終日、役所の激務を処理した後で、ほとんど毎日のように夕方になるとタクルのところへ来るのであつた。彼の家はカルカッタのシヨババザール区ベネトラ街にある。アダルはこのところ何日も来なかつた。

聖ラーマクリシュナ「どうしたい、何日も来なかつたね？」

アダル「はい、用事がたくさん重なりまして——。学校関係の協議会やら、そのほかいろいろなミーティングに出なければなりませんでした」

聖ラーマクリシュナ「ミーティングや学校のことばかりに気を取られて、ほかのことは皆忘れてしまったのかい？」

アダルは恐れ入つたふうで——「はあ、みんな抑えられて、引つ込んでしまったのでございます。あなた様のお腕はいかがでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「これ見ておくれ、まだよくならないんだよ。プラタプの薬を飲んでいるんだがね」

しばらくするとタクルは、突然アダルに向かっておっしゃった。——「いいかね、こういうものは皆、はかないものなんだよ。ミーティングだの、学校だの、役所だの、みんなその場かぎりのはかないものだ。神だけが実在(グレスト)で、他はみな非実在だ。心の全部を捧げてあの御方を拜むことが大事だよ」アダルは沈黙していた。

「この世のことは皆、一時のはかないものだ。身体は今あったかと思えば、もう無い。急いであの御方を呼ばなけり(原典註2)やね。」

お前たちは、何もかも捨てる必要はないよ。亀のようにして暮らせばいいんだ。亀は水のなかを泳ぎ廻っているが、だが卵は岸边に産んである。心は全部、その卵のある場所に行っている。

キャプテンはこのごろ、とても心境が進んだよ。礼拝で坐っている時など、ほんとに聖仙(リシ)そっくりだよ！ 樟脳(しょうのう)で献灯(けんとう)をして、美しい讃歌を誦(よ)む。そして、礼拝して立ち上がるときは、目が蟻に刺されたようになっている！(感動のため目が充血して見開いている)それに、いつもギターやバークヴァタのような聖典を読んでいるし——。わたしが一つ、二つ、イギリスの言葉を使ったら、赤くなつて怒つてさ、こう言ったよ——『英国式の教育を受けた人間は不道德です！』

しばらく後、アダルはいいねいな口調でこう申し上げた——
「あなた様はわたくしの家にもう長いことおいで下さいませんので、客間は嫌な臭いがいたします

(原典註2) アダルはこの数ヶ月後に亡くなった。

(聖者がしばらく来ずに世俗的な人ばかり出入りするの——)。みんな暗闇になったような気がいたします」

信者のこの言葉を聞いて、タクルの愛情の海はひとしお水かさを増した。突然立ち上がり、恍惚となつてアダルと校長の頭と胸に手をふれて祝福して下さった。そして、愛情あふれんばかりの表情でこうおっしゃる——「わたしはお前たちを、ナーラーヤナだと思つてるよ。お前たちこそ、わたしの骨肉みうちだよ！」

こんどは、マヒマーチャランが部屋のなかに戻つてきて坐つた。

聖ラーマクリシュナ(マヒマーに向かつて)さつき言つた禁欲の話はほんとうだよ。精力を出さないようにしなければ、教えをほんとに理解することはできないよ。

聖チャイタニヤがある人に、『あなたは信者たちにこんな多くの教えを授けておやりになるのに、彼らがさっぱり進歩しないのは何故でしょうか?』と聞かれて、こう答えた。

『この連中は、女と交わつて精力をムダ使いするから進歩しないのだ。だから真理かみを体得することができないのだ! 穴のあいた壺に水を入れておくと、みんな流れ出してしまう!』

マヒマーはじめ信者たちは一言もない! やがて、マヒマーチャランは口を切つた——「神様に、私どものことを願ひして下さいまし。私どもにその力が生じますようにと——」

聖ラーマクリシュナ「今から気をつけろよ! アシャル月(雨期)の水は全くの話、堰せき止めるのに力がある。だが、もうたくさんの水が流れ出てしまった! まあ、今からでも土手を築せいておけば大丈夫だろう!」